
今日で〇〇辞める！

舞傘 真紅染

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日で。。辞める！

【Nコード】

N5299V

【作者名】

舞傘 真紅染

【あらすじ】

彼は諦めていた。何をか。すべてを。しかしどこかに「諦めたくない」思いが残っていた。

彼は信じたくなかった。目の前の現実を。しかし彼がどう思おうと、現実はずっと揺るがない。

今日で。。辞める！ シリーズの1作。他とは違いシリアスなのにご注意ください。

（9月29日。続きを書く際に、他のページよりもまとめるべきかと思ったため、完結を連載中に変更）

彼はついに諦め、抵抗を投げ捨てた。

途端、まるで激流に飲まれたかのような衝撃が彼へ襲いかかってくる。痛くて苦しいと彼は思った。思ったが、できればこのままずっと流され続けたいと願った。どれだけ苦しくとも流され続けた方が幸せだと、彼は知っていた。同時に、それが叶わない願いだとも知っていた。流れは彼を押しやっていく。意志を持っているかのよう、とある方向へと。

流されていると、彼の手が何かに当たった。本能で伸ばされた腕は、その何かを勝手に掻き分けていく。何かは、とても硬かった。しかし彼の爪は簡単に何かを切り裂いていった。時間稼ぎにもならないか。と、彼は笑った。

意思とは関係なく背中を押され、彼の爪はついに『皮』を突き破った。

初めて肌に感じた空気を、彼は懐かしく思いながら吸い込んだ。どこからか、音ではない歓声を聞いた。彼は目を閉じ、その歓声に耳を傾ける。薄い唇が少しだけ曲げられた。歪な形になった唇は、彼の心を如実に表していた。

しかし残念ながら、その心を読み取れる者はこの世のどこにもいなかった。

再び目を空けた彼は身体を起こし、台座から降りた。彼が寝ていたその台座は、灰色の空間にぼつんとあった。どこかの室内らしい壁に設置された2本のロウソクが、異様なほど明るく部屋を照らしていた。

その部屋は石造りでかなり広かったが、柱がまったく存在しない摩訶不思議な構造をしていた。装飾らしい装飾はなく、床に敷かれた赤い絨毯が殺風景な部屋を彩る唯一のものだった。

彼は振り返る。

台座の上には引き裂かれた器があり、元は白色だったのだろう台座を赤黒く染めていた。ひたりひたりと石床に落ちる体液が、器の新鮮さを物語っている。かつてはすべてのものを魅了していた前の器も、今は醜い肉の塊としてそこに転がっていた。もちろん動くことはない。

しばらくその器を見下ろしていた彼は、不機嫌そうに眉を中央に寄せた。瞬時に器が跡形もなく消えうせ、台座が本来の白い輝きを取り戻す。最初から台座の上に何もなかったかのように。

それきり台座に興味をなくした彼は、柔らかい絨毯の上を素足で歩き出す。すると、どこからともなく白い布が現れ、彼が一步足を動かすたびに彼の浅黒い肌を覆っていった。白い布はすぐ赤く染まり、斑な文様を浮かび上がらせていく。

「お、お待ちしておりました」

しわがれた声がした。声は随分と震えていた。彼は足を止め、声の主へ目を向ける。随分小さい男がいた。禿げた頭に少し残った髪や眉は銀色、肌は声同様しわくちゃで、手足が異様に細い。片膝を床につけている男の背中には、様々な大きさの羽が5つ、好き勝手に生えていた。

しわだらけの顔に埋まっている小さな瞳は透けるような水色の瞳で、安堵に震えていた。彼は微笑を浮かべる。そこには申し訳なさと、また出会えた喜びが混じっていた。男はそのことに気づいただろうか。5つの羽が不規則に動いた。

「【アベスタ】。すまない。世話をかけた」

「いえ」

男、アベスタは首を横に振る。アベスタにとって彼がそこにいる

のなら、他のことはどうでも良かった。言葉を失って頭をたれたアベスタを見て、彼は息を吐き出す。

罪悪感に、押しつぶされてしまいそうだった。

アベスタが顔を上げた。彼は何も言わずに歩き出した。少し首をかしげた後、アベスタは彼の後ろにつき従った。

「みな、この時を待っておりまして。＜魔王＞様」

彼、＜魔王＞は、諦めたように笑った。

・憂鬱・（後書き）

以前予告版としてあげていたものをちょっと修正したものです。

< > 【 】 を付け加えてみました。こういう書き方もありますよね。初めての試みです。

【 】 はその話で初めて出てくる人名（一話に使っても二話目にも使います）。< > は役職？ 《 》 はその他この世界特有の言葉に使います。

- 孤独 -

1人の老人が城の廊下を急ぎ足で歩いていた。彼は「アベスタゴウロンドヘツジメンティアス・ミルデエナボムヴァ」という名の、魔界国の<利^き大臣>——今回の魔王は右利きなので右大臣のことを指す——だ。ガリガリの手足は今にも倒れそうで、体中にはシワとシミが広がり、禿げた頭、横と後ろに残った銀髪はわずか残っているという、なんとも頼りない姿をしている。見目だけを考えれば、この国の先行きが不安になってしまっただろう。こんな年寄りがこの国のナンバー2か、と。

だがもちろん、普通の年寄りではない。「アベスタ」（長いため普段はこう略している）の背中には、こうもりの羽とよく似たものが合計5つ、不規則に生えていた。羽の大きさは、手のひらほどから彼の身長より大きいものまである。彼は魔族——それも親を介さず自然に生まれた《土^{しどく}族》と呼ばれる尊い存在——だった。

普通の魔族より強大な魔力を持っている《土族》は、他の魔族から尊敬される対象となる。

「《モートン》、アベスタ右大臣」

「……《モートン》」

すれ違ったトラに似た顔の魔族がアベスタに挨拶をした。《モートン》、とは朝に用いる貴族の挨拶である。トラの魔族は顔をゆがめたまま、頭を下げた。アベスタは内心の苛立ちをなんとか押しとどめて立ち止まり、挨拶を返す。急いでいるのだが、彼が再び頭を上げるまで歩き出すことはできない。それが宮廷での（貴族たちの）礼儀である。

アベスタの苛立ちを知ってか知らずか。トラの魔族は腕を大きく、かつ、ゆっくり回すように振り下ろしながら上半身を倒し、のろのろと頭を上げる。持ち上がった彼の顔を見て、アベスタはまたか、

とうんざりした。

目の前の魔族はアベスタが急いでいるのを知っていて、わざと動作を遅らせている。血走った目と、大きく開いた口を見れば分かる。嘲笑の笑みだ。〈魔王〉の側近中の側近である〈利大臣〉にして《士族》であるアベスタへの態度ではない。

しかしアベスタは短い挨拶以外何も言わず——先ほどの礼は目下のものが目上に対して行う——に歩き始めた。背中に視線が注がれているのを感じつつ、ただ急ぐ。なんでもない顔をしておきながら、彼はつい背中に生えた羽を意識してしまう。『5つ』の羽が、痙攣するように動いた。

魔族の中で『5』は不吉な数字とされていた。

アベスタの背に生えている羽の数は5つ。羽が5つあることは、彼が《士族》であるよりも、〈利大臣〉であるよりも罪深い。『5』を身に宿している魔族は、魔界では家畜以下の存在であった。なので、身体のどこかに『5』を持つ魔族のほとんどは、魔力を操作して姿を変える。アベスタのように堂々と晒している者はほばいない。「いけません。慣れたつもりでありましたが」

やれやれ。ふと我に返ってそう息を吐き出したアベスタは、揺れていた背中の羽をピンと伸ばした。あちこちから降り注ぐ好奇の視線を堂々と浴びる。生まれたままの姿を隠す必要はどこにもない。自分は恥じることを何もしていないのだから。

胸を張って歩く彼に向けられている視線には、嘲りだけではないものもあった。同じく『5』を持つ者かもしれないし、どれだけ差別されようと意に介さない彼への純粹な敬意かもしれないが、こうして『5』への認識を変えていく存在はたしかにいた。そのことが彼の支えであり、彼がここまで出世した理由でもある。

考え込んでいたアベスタだったが、とある部屋の前で足を止めた。

「〈魔王〉様、アベスタです」

「ああ。入れ」

「失礼いたします」

声をかけてから部屋へと入る。真正面に置かれている机、その机の上に置かれた書類を手早く処理している男が見えると、アベスタは一瞬だけ息を止めてしまう。耐性のない者だとそのまま倒れてしまうので、それでもアベスタは慣れている方だ。側近が＜魔王＞に会うたび、彼の魅力に気絶するわけにはいかない。アベスタは腹に力を入れた。

「どうした。会議は明日のはずだが」

低い声がアベスタの鼓膜を狂わせる。＜魔王＞は書類から目を離していない。現＜魔王＞は先代とは違って真面目なようで、毎日こうして淡々と仕事をこなしていた。

書類を読むために伏せられた瞳、うねった豊かな髪は共に黒い。先代＜魔王＞とはまったく異なる魅力を辺りに散布している。＜魔王＞の側近は大変名誉な仕事だが、自分の意識を保ち続けなければならないのが一苦労だ。アベスタは苦笑気味にため息をつく。

「いえ、《人界》^{じんかい}の様子を探ってきましたのでご報告をと」
「そうか」

返ってくる反応はそつけない。しかしながら現＜魔王＞は始終この調子だ。拒絶されなかったのでアベスタは気にせず報告する。

「＜魔王＞様が復活なされてから51年経ちますが、どうやら＜勇者＞はまだ誕生していないようです」

書類をめくっていた＜魔王＞の指が一瞬だけ止まるも、すぐに動き出す。

「人間たちの様子は？」

「ほとんどの人間が変わらぬ生活を送っております。＜魔王＞様の復活を知らぬのでしょう。ですが一部の地域では不作が続き、国王への不満が溜まっていく模様です。近々《魔族狩り》が懸念されます」

「どの地域だ」

「《メニグイア》です」

「ふむ……《斜栓》^{しゃせん}——人界と魔界の間にある森——から近いな。

念のため、近隣の住民を避難させておけ」

「かしこまりました。兵の派遣はどうされますか？」

「今動かすのは人間たちへ無意味に警戒を与えるだろう。もう少し様子を見てからだな。だが偵察はこのまま続ける。あとしばらくは《斜栓》での狩猟を控えるように、通達を」

他にも2、3話し合った後、＜魔王＞はようやく顔を上げてアベスタを見た。明るい黒の瞳にアベスタが写っている。アベスタの呼吸が1秒といわず10秒ほど止まったが、すぐに持ち直し、膝をついて臣下の礼をとった。アベスタは知っている。臣下の礼を自分たちがとるたび、＜魔王＞の目がいつも孤独に揺れているのを。

それでもアベスタは臣下としての姿勢を崩さない。＜魔王＞が孤独から開放された時、『ここ』からいなくなるのを本能で悟っていた。どれだけ蔑まされようと、彼がいなくなるのだけは、アベスタには耐えられそうになかった。

彼もまた、知っていた。魔族というものが、そういう風に作られていることを。

「いや、私もか」

「何か？」

「ん？ ああ悪いがアベスタ、この書類を2人に届けてくれ」

「は、はい」

書類をアベスタに差し出した＜魔王＞は、何事もなかったように仕事を続けた。

- 孤独 - (後書き)

かっこ、をつけくわえ。

- 希望 -

彼を表す<魔王>というのはただの称号であり、彼の名前ではない。さらに言うならば、周りが勝手にそう呼び始めただけで、彼は元々<魔王>ですらない。彼に与えられた本当の称号は<地を統べる者>だ。今ではもう、この地上でその称号を知るものは彼1人だけとなっているが。

一体いつから<魔王>と呼ばれ始めたのか。先代、先々代、その前……記憶をさかのばれば答えを得られるだろう。彼はその努力をさっさと放棄し、かなり昔だ、で締めくくる。

この世に生を受けた者たちには、生まれた瞬間から名前がある。アベスタのやたらと長い名前にしても、あれは彼自身が決めたものではなく、生まれた瞬間についていた名前だ。中には「ダ」という短すぎる名前のものだっている。では彼の名は何なのか。

答えは「ない」だ。

そして、なくても困ることは何1つなかった。誰も彼に名前を尋ねない。必要ないのだ。<魔王>という存在が、この世に唯一無二であるがために。

しかしながら、彼ら歴代の<魔王>は密かに名前を持っていた。それは自身の好きなモノ（動植物・食べ物・色・季節・言葉）であったり、音を適当に並べただけであったり、何か深い意味を持たせたりと様々だった。結局、今まで役立ったものはないが、現<魔王>である彼もまた自分に名前をつけていた。もしかしたら必要になるかもしれない。そんな『もしも』がいつまでたっても捨てられないのだ。

考え込んでいた彼の形の良い真つ赤な唇が歪み、白い歯が顔を出す。この場に誰か魔族がいたならば、確実に卒倒していただろう。<魔王>の行動は、まばたき1つでもすべての生き物を魅了してし

まうのだ。彼にとっては大変不本意なことに。

「<ロー・アスムウェル>。英雄たるもの、か」

口から漏れたのは、<勇者>に与えられる名前（記号）だった。

魔力の質（密度や量）が悪い人間の中で数百年に1度だけ生まれ
てくる、魔力の質が非常に高い突然変異。その存在を<勇者>とい
う。<勇者>の魔力は<魔王>に次いで高く、この世で唯一<魔王
>を倒せる可能性のある存在である。

そんな<勇者>がようやく生まれたと報告を受けてから、すでに
12年が経っていた。これほど12年が長いと思つた経験など、彼
には覚えがない。

修行の一環なのか。《斜栓^{しゃせん}》付近までやつて来た<勇者>を、彼
は気晴らしに見に行つた。首から五画星^{ごがほし}をぶら下げた少年は、まだ
<勇者>と呼ぶには幼く、身に宿る巨大な魔力を持て余しているよ
うだった。その意味で言えば、彼にとって期待はずれであつた。倒
されるまでもう少し待たなければいけないのか、と。

その時を思い出したのか。唇が再び動き、今度は綺麗な弧を描く。
この場に運悪く誰かがいたのならば、その誰かは下手をすると死ん
でいたかもしれない。それはあまりにも珍しい、彼の純粋な笑みだ
つた。

『我が名は<ロー・アスムウェル>。当代の<勇者>だ。お前が<
魔王>だな』

『ああ、そうだ』

彼からしてみれば、今まで幾度となく繰り返してきたやり取りで
ある。面白みも何もない。だが彼は楽しそうに思い出す。幼い顔が
不機嫌そうに歪んだ様を。

『貴様つこちらが名乗つたというのに、名乗らないとはどういうつ
もりだ！ 名前を言え』

『……カウクス。カウクス・ゴーリエ』

それは彼がようやく見つけた差異^{きぼう}だった。

・希望・（後書き）

エラーがでたため、これだけ遅くなってしまいました。がく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5299v/>

今日で〇〇辞める！

2011年10月1日03時18分発行